



八重清敏さん(64)

＝アイヌ協会優秀工芸師、鶴居アイヌ協会会長

――木ぼりのお仕事に加え、講師もしてらっしゃいますね。以前はほかのお仕事もなさっていたんですか。

中学を出て本州で1年くらい働きました。もどって来た時、阿寒湖で木ぼりをしているおじさんが「手伝え」って声かけてくれ、見よう見まねで覚えました。木ぼりの物が良く売れた時期でした。売り上げが下がり、トラック運転手もやってみたけど、やはり木ぼりが向いているとずっとやっています。弟子屈町の屈斜路湖と川湯温泉に二つ店を出していた時期もあり、昼間は屈斜路湖、夜は川湯温泉で商売していました。――優秀工芸士になられましたが、ご自分の作品で気に入っているものは。

自分では「どれも良いもの無いなあ」と思ってるんだけど、いって言えばシャチと船をほったイクバスイ(おいのりの道具)かな。

――カムイノミの指導もなさっていますね。いつごろから

始められましたか。

祖母が家のそばの三又の木に毎年おいのりしてたんだね。祖母が亡くなった時、母に言われてつぐことにしたんです。40歳前位。やり方は親戚の八重九郎さんをまねて。九郎さんには子供のころから何度も会っているけど、昔のアイヌ文化を大事にしていて、おいのりでも昔話でも良く知っていた、とても尊敬する人ですね。ほかに鉋路や屈斜路の年寄りたちを見てカムイノミを覚えました。自分の家にヌサ(祭壇)を作ったのは12年位前かな。――カムイノミをするのはどういう思いからですか。

自分がアイヌだと感じる。これから新しいアイヌ文化を作っていく人もいるだろうけど、自分はこういう古いものを守っていきたいと思っています。

◇
このコーナーでは、さまざまなお仕事をされるアイヌの人にインタビューします。

神様においのりする時には、さかすきにお神酒を入れてお供えします。おいのりが終わると、もうお神酒は神様が受け取ったことになりす。このさかすきに入っているお酒は、パケシとって、「神様が飲んだ残り」といわれます。これを飲むことは、神様と同じお酒を分け合うことで、大切に考えられます。自分でも飲んで良いですし、他

もらったお酒はその場で飲んでも良いですし、持ち帰って自分の家で飲むこともあります。

タンベエエラムマン?

「きみ、これ知ってる。」の意味

■パケシ

男性と女性の間でわたす場合は、夫婦やごく親しい間柄です。

この話では、アンロルンカムイが主人公にパケシをわたしたため、いかなずけである幌尻岳の神がやきもちをやいてしまったのですね。

コタンコロカムイを訪ねたアンロルンカムイ



そこでポロシルンカムイを私の家に招き、さかすきにイクバスイ(おいのりの道具)をそえてお酒を注ぎました。ポロシルンカムイはいきなりさかすきを投げつけたかと思つと、「あの男と浮気をしたのだから」と言いながら大暴れし、私は大けがをして気を失ってしまいました。

ポンオйна(小伝)
＝登別市の話

(金田一京助「ユーカラ集Ⅰ」より)

私はコタンコロカムイシマフクロウの神の妹で、兄と姉に大切に育てられました。私はポロシルンカムイ(幌尻岳を守る神)といひなすけになつており、いずれ結婚することになつていました。そろそろ結婚するころ、兄は神通力で私の家をつてくれました。私の家に行くと、兄の家から来た話し声が聞こえます。兄の家に行ってみると、アンロルンカムイという神が、遊びに来ていたのです。兄は喜んで、お酒を造つて客神をもてなしました。客神は兄に向かって「私からも妹君にさかすきをすめて良いでしょうか」とたずねました。兄は「ぜひ」と答えたので、私は客神からさかすきを受けました。そのとき、幌尻岳の方からとても大きな音がして飛んでくる者があります。ポロシルンカムイでした。兄は新しいお酒を入れたはちを用意して「さあ、おまえの家でもてなさい」と言いました。

戦いを終えたアンロルンカムイは酒宴を開いた



偉大な神の短気

コタンコロユビ、コタンコロサボ、カムイチレス、シサクチレス、イエカラカラワ(郷神なる兄と姉が、私を大切に育てていて、これは、このお話の最初の5行です。金成イメカヌ(マツ)という、キリスト教を学んだアイヌの女性が自ら書き残したもので、元の文は6964行もあります。大変な長さですが、加えてとても美しい文章です。今回はこの長い話を短くまとめてしようかししました。アンロルンカムイと名乗っていたのは、実は英雄のアイヌラックル。主人公のいかなずけになっていた幌尻岳の神は、北海道の十勝地方などではとても大切な神様とされていますが、この話では敵役となっています。自分のいかなずけと仲良くしたことにやきもちをやいて、めちやめちな暴れ方をしたり他の神をけしかけて殺そうとしますが、最後はばつを受けました。

だれかの歌う声が聞こえ、気がつく自分のねどこにいました。あれほど切りさかれた着物には新しくなっていて、傷だらけだった体もすっかり治っていました。私が死ぬほどの傷を負ったのを、客神のアンロルンカムイが治してくれたのでした。かれは例えようもないほど美しい少年でした。アンロルンカムイは「私がよいなことをしたばかりにあなたを大変な目に合わせた。私もポロシルンカムイから戦いをいとまれた。もう生きて会うことはできないだろう」と去ろうとしました。「私のためにそんな危ない戦いに行くとは、あなたが死ねば私も死にます」と言いました。アンロルンカムイは私をだきしめ「そのように言つて下さるか」と額にキスをしました。「私にひどいことをしたポロシルンカムイがあなたと戦うなら、私も一緒にいきます」と言つと、アンロルンカムイは私をなではじめました。気づくと、私の姿は刀のかざりくぎに変わっていました。かれは私を刀のえにはめこみ、空に飛び上がりました。いくつもの天をくぐりぬけ、やがて神々の世界のとひらへ着きました。とひらを守る神々は「あの恐ろしいポロシルンカムイと戦おうとは、命知らずな」とあざけりました。



ポロシルンカムイのいかりを買い、天界と地の底の世界で戦うアンロルンカムイ